
綺麗だね ♪

こいん0712

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

綺麗だね ♪

【Nコード】

N3593K

【作者名】

こいん0712

【あらすじ】

主人公早坂 恋この名前は嫌いだったが北條可憐との出会いでこの名前に持つ思いが大きく変わる

レンの名前から始まった青春ラブストーリー

恋の恋スタート

第一話 意外な出会い（前書き）

どうも、こいん0712です、この小説を読んでもくれた方はできればコメントよろしくお願いします
後アドバイスもいただけたら嬉しいです

第一話 意外な出会い

僕は、早坂 恋

恋と書いてレンと読む。男なのにこんな名前は嫌だと思っていたけどこの名前がきっかけで思いもよらぬ出来事が起こる

僕はこの名前のことで馬鹿にされて喧嘩したのが中学生の入学式の時それから、僕の中学校生活は喧嘩三昧だ。

でも、僕は頭は悪くない

ちゃんと授業も出ていたし、予備校にも行っていた

多分見た目も普通と思うけど・・・

髪を染めたりなんかもしてない

ただ・・・この名前の事で馬鹿にされるのが嫌だったから毎日僕をおちよくる奴らと喧嘩を毎日していた

さつきも言っただけど成績も悪くない、だからそれなりの高校に行けたそして・・・入学式

クラス発表の時僕の名前で笑ってる奴はやっぱり何人かいた

僕は自分がどのクラスなのか見てすぐ教室に行こうと思ったら

僕の名前をじいっと見ている髪は長くて清纯そうな女の子だけど・
この名前を見てわらうんだろうなあと思って話しかけてみた

僕「どうして俺の名前見てるの？やっぱり面白いから？」

僕は心の中では自分のことを僕と呼ぶけど外では俺と言っている

清纯そうな子「いえ、そんなただ・・・」

僕「ただ？」

僕はちよつと怒った声で言った

すると、彼女は少し震えた声で「ただ・男の人に言うのは失礼か
もしれないけど 綺麗な名前だなあと思って」と言った

僕はそんな事16年間生きてきて一度も言われたことが無かったの
で泣きそうになった

すると彼女は、「あの、恋と書いて何て読むんですか？」

と聞かれ僕はつい嬉しくなって「レン、恋って書いてレンって読む
んだ」

とちよつと大きな声で言ってしまった

すると彼女は、「レンかあ、ますます綺麗な名前だね」って笑顔で
言った

僕は「さっきはあんなこと言ってごめん 君の名前も聞かせてもらってもいいかな？」

とぼくは言った

すると、彼女は「ううん大丈夫気にしてないから、でもちよつと怖かったな」

「ごめん」

僕は謝る

「あつそつだ私の名前だったね私は可憐 北條可憐私にはちよつとカワイすぎるんだけどね」

彼女は笑いながら言った

「そんな事無いよ可憐さんに似合ってる名前だよ」僕は言った

「本当にそう言ってもらえて嬉しいな♪」と可憐さんは、ニツコリしながら言った

そこでぼくは気づく初対面の人にいきなり名前で呼ぶのは失礼じゃないのかと思い僕は

「ごめん、いきなり名前で呼んだりして・・・」とちよつとシヨンボリした顔で言った

すると、可憐さんは「別に、いいよむしろ名前で呼んでくれる方が嬉しいかな」

僕は「そう？」

と聞き返した可憐さんは「うん、これからも下の名前で呼んで」と笑いながら言った

「うん、じゃあそうする！」と僕はイキイキしながら答えた

可憐さんは「じゃあ私はこれからレン君って呼ぶね」とかわいく言った

僕は「わかった、俺も下の名前で呼ばれるほうがいいや」と言う

可憐さんは「でしょ、でしょ何か名前で呼ばれるとつい嬉しくなるんだよね」といった

僕は「たしかにそうだね下の名前で呼ばれると親しみやすいし・・良かったら俺と友達になってくれない？」と僕はちよつと恥ずかしがってる感じで言う

すると可憐さんは「全然いいよ、じゃあ今日から私たちは友達だね」と全然嫌がりもしないで言うてくれた

僕は正直嬉しかった

「じゃあメルアド交換しようか、携帯持ってるでしょ？」と可憐さんはいきなり言うてきた

「持ってるけど・・いきなりはマズいんじゃない？普通お互いのことがわかってから交換するものじゃないの？」と僕はそう聞いてみた

「そんな恋人になるんじゃないんだから、レイ君っておもしろーい」と可憐さんはクスッと笑いながら言った

実は僕中学生の時は喧嘩ばかりしてたから携帯には家と母さんと父さんのアドレスしか入っていないからどんな感じなのかわからなかった

だからぼくは「そういうもの？」と聞いたら

「そういうもの」という返事が返ってきた

そして、僕たちはメルアドを交換した

「あつそうだ可憐さんは何組だった？」と聞くと

「あつ、私？実はね1年じゃなくてこの高校の3年なの」と可憐さんはビックリ発言をした

「えっ」僕はこれしか言うことが無かった

「今年からこの高校に私の妹が通うから妹は何組かなあと思ってみにきてたの」

「そうだったんだ」僕は驚いた表情で

「じゃあこれから敬語で話すね先輩だから」と僕が言うと

可憐さんが「敬語はやめてほしいな私達は友達なんだからさあ」といった

「でも……」

「でも……じゃない!!」と可憐さんは言った

僕は「じゃあ敬語じゃなくて普通に話すね」というと

可憐さんが「うん、そうして」と笑顔で言う

可憐さんは「もう、時間だから私教室に行くね」「今夜にでもメールするねじゃあバイバイ」と言い走っていった

走るタイミングが早すぎたのでバイバイとも言えなかった今日メールがきたら謝ろうと思いつつ僕もクラスを確認して教室に向った

そして、担任の長い話が終わって帰るときに後ろから軽く蹴られて「ねえアンタ」と言われ

振り向くと短髪のボーイッシュな女の子が立っており「ねえアンタさウチの姉貴と何か話してたでしょう」

と言われた。僕はこの子誰?！と思った

第2話へ続く

第一話 意外な出会い（後書き）

本当はもうちょっと書くつもりだったのですが疲れてきたので一度きります

ここまで読んでくれてありがとうございます2話にも期待をしてくてください

第2話北條妹（前書き）

どうもこいん0712です
いつも言ってますが出来るだけ感想が
ほしいです お願いします
出来ればアドバイスもお願いします

第2話 北條妹

僕は鞆に荷物を詰め込んで鞆を肩にかけ教室からみんなが出るのを待っていた

何で待つてるか？人にぶつかったりすると喧嘩になるので帰る時はいつもそうしているんだ

そしてみんなが教室から出たら僕も出ようとしたそしたらいきなり後ろから軽くけられた

「痛って、なにするんだよ！」僕も殴ってやろうと思い拳を握って僕を蹴った奴の方を向いたら

何と女の子だったのだ

見た目は短髪でボーイッシュなかんじの女の子だった

そしてその女の子は「何するんだよって言われてもねえ、蹴りとか言いようがないんだけど・・・」と屁理屈みたいなことを言った

僕は女の子じゃなかったらおもいつきり殴やるのにも思いつつ

クールな感じで「で何か用？まっ用がないのに蹴りいれる女なんていないと思うけどな」と言った

女の子は「何カッコつけてんの？全然カッコついてないんだけど」とムカツクことを言ってきたので

僕は「あつそ、じゃあ用がないんだつたら俺帰るね早くゆっくりしたいし」といつてみた

すると「ちよつと待ちなさいよ用があるから蹴ったんじゃないの」と女の子は困った感じで言う

僕は「わかったけど、手短に頼む」と僕が言うと

女の子が喋りだす「アンタ今日の朝姉貴と話してたでしょう」と言う

朝は・・・可憐さんとしか話しかけてないけど

可憐さんも妹がいるって言うてたなあと思ったその時

僕はこう言った「まさか、お前が可憐さんの妹？」

すると女の子は「そうよ、悪い？私が北條可憐の妹の北條美鈴よ」

ええゝゝゝ可憐さんはあんなにおしとやか、なのに妹はこんな性格なんだ僕は心の中で驚いた

「それより、あんた何姉貴と話してたのよ。もしかしてナンパ？」と北條妹に言われた

「何でお前に言わなきゃいけないんだよ」僕はそう言った

「私はね姉貴をアンタみたいに軽い男から守る為にこの高校に入っただから聞く権利があるの」と北條妹は言いはる

僕は教えたくないけどめんどくさくなったのでその事を北條妹に全部話した

「俺の名前は周りから笑われる名前だから俺の名前を見てた可憐さんもそうかとおもって話しかけたんだよでも違ったから謝ってそれからいろいろ話が盛り上がってそれから俺が友達になってくれて頼んだらあっさりokもらってメルアドを交換してそれで終わり」

「本当に？」と北條妹に聞かれ

僕は「本当」と答えた

「で、アンタの名前なんて言うのよ周りから笑われる名前って言うぐらいだから相当変な名前なんでしょうね」と北條妹に言われたからこいつだけには教えるのは嫌だったけど向こうの名前も聞いたし、しょうがなく自分の名前を言うことにした

「早坂 恋だよ」

「何よ普通の名前じゃない」と北條妹言われた

僕は「恋愛の恋って書いてレンって読むんだ」と教えたら

北條妹は、「恋って書いてレンって読むの？そりゃ周りも笑うわよだって男の癖に恋って誰でも笑うわよ」と大爆笑しながら言われた。

僕はかなり腹がたち北條妹をにらんだ

すると北條妹は「何よやるっての？」いいかまえたした

僕は女を殴るなんて馬鹿らしくなって「じゃあなー北條妹」と言つて階段を降りて行つた

北條妹は「何よ北條妹ってー」と怒つた感じでいつてきたので

僕は「お前のあだ名ー」と言い校舎から出て駐輪所にとめている自転車に乗つて家に歸つた

そして、いつも通りに風呂に入つて、晩御飯食つて歯を磨いて自分の部屋で勉強をしていると

携帯の着メロが鳴つたので携帯を見ると可憐さんからだった

その内容は・・・・・・・・

第2話北條妹終わり 第3話へ続く

第2話北條妹（後書き）

最後までよんで下さってありがとうございます 1話がお気に入りに登録されていたのでかなり嬉しいです お気に入りに登録してくれた方にお礼がしたいのでユーザー名を教えてくださいたら嬉しいです
引っ張るところじゃないけど3話に引っ張りました

第3話始めてのメール（前書き）

どうも、こいん0712です僕は自分の作品をもっともっと良くしたいので皆さんからの感想や駄目だしが欲しいのでよろしくお願いします

第3話初めてのメール

僕は家に帰ってきていつもどおり風呂に入り、晩飯を食った後見たい番組とかが有ったらその番組を見てから勉強をする。

今日は見たい番組も無かったので晩飯を食ったらすぐに勉強をした
30分くらいやっているといきなり携帯の着メロが鳴った

僕はあわてて携帯を確認すると可憐さんからだった。

本当にメールしてきてくれたのだ

そして、文の内容は・・・「明日レン君と私の妹の入学祝いパーティーやろうよ」というものだった

メールをしてくれたのはかなり嬉しかった

僕は「メールをするのは初めてだから緊張します、メールありがとうございます。明日のことだけど本当に俺もいいの？」返信した

すると、1分もたたない内に「いいよ、いいよ全然人数は多いほうがいいいし」とメールが返ってきたので

「じゃあ明日お邪魔させてもらいます」と僕は返信した

また1分もたたない内にメールが着た内容は「レン君硬いよー」それでパーティーはカラオケでいい？」と書いていた

ので僕は「いいですよー行きたいところ無いですし」と精一杯軽い文章で返信をした

次は3分くらいでメールが返ってきた

内容は「じゃあ、明日は湖野のカラオケ行くから、学校の近くの駅集合ね」後帰りに妹がよりたい場所があるらしいから、ちょっと遅くなるって親に言つといたほうがいいよ」

と長文のメールだった

僕は親とは離れて一人暮らししているけどメールで言うのも嫌だったから言わずに

「了解です。じゃあ明日楽しみにしてマース」とメールを返信した

僕は眠くなってきたのでベッドに入ってぐっすりと明日にむけて眠った

第3話始めてのメール終わり第4話に続く

第3話始めてのメール（後書き）

ここまで読んで下さってありがとうございます

さらに感想をもらえると嬉しいです

今回は、メールがテーマだったので結構短いけどこれで3話終了です

4話も楽しみにしてください

第4話北條妹（2）（前書き）

どうも、こいん0712です

この小説は、自分でもかなりお気に入りです

後は皆さんの感想があるとサイコーなのですが……出来れば感想よろしく願います

第4話北條妹（2）

昨日可憐さんからメールがあり今日可憐さんと北條妹と遊ぶことになった

僕は基本いつもだらだらなＴシャツにジャージだが今日は日本橋用の服で駅へ向った

日本橋用というのはちゃんとしたオシャレな服の事だ

僕はそう呼んでいる

僕は、いろいろ準備をして自転車で駅に向かった

駅に着いたらまだ可憐さんたちはまだ来てなかったので近くにあった売店で本を立ち読みしてたら

「早坂」と誰かに呼ばれた気がしたので振り向くと北條妹が立っていた

「ども、北條妹さん」と僕は挨拶をした

北條妹は「だから、何よ北條妹ってせめて北條とかにしなさいよ」と大きい声で言った

僕は「お前のあだ名可憐さんの妹だから北條妹」と僕は説明した

「わかった・・・とうぶんその呼び方でいいわよ私も昨日

ひどいこと言っちゃたし」と北條妹は言った

「昨日？」と僕が聞くと

「昨日、あなたの名前は男の癖に恋だからって笑ったでしょ」と北條妹はしょんぼりした顔で言った

僕は重い空気は嫌いなので「いいよ、別に気にしてない」と北條妹に言った

「違うのあなたの名前聞いて本当は……」と北條妹は恥ずかしくなってる感じで言った

僕はこいつ、初めて会った時キャラが変わってないか？と思いつつ「本当は？」と北條妹に聞くと

「本当はあなたの名前が綺麗で素敵な名前と思ったのよ何か文句ある？」と北條妹は可憐さんと一緒のことを言ってくれた

「本当にそう思う？」僕は北條妹に聞く

「しつこいわよ私がそう言ってるんだからそれで、いいじゃない」と北條妹は会ったときのキャラに戻り行った

「そうか……ありがとな」僕が言うと

北條妹は「べつにアンタを褒めてるんじゃないんだからね私はアンタの名前を綺麗だっと思ってんだからね」と顔赤くしながら言った

僕は「ああ、それでもありがとう」と恥ずかしい台詞を言った

二人とも沈黙していた

すると、北條妹は「あっそうだ今日姉貴来ないって」と言った

えええーじゃあ今日はこいつと二人つきりですか？

第4話北條妹（2）終わり 5話へ続く

第4話北條妹（2）（後書き）

ここまで読んで下さってありがとうございます

第5話は北條妹とデートっぽいことをする話なので楽しみにしてください

第5話 アクシデント（前書き）

どうもこいん0712です

僕なりには面白い展開になって来たので期待してください

第5話 アクシデント

今日遊ぶ約束してた可憐さんが、来れなくなったらしいので今日は北條妹と一緒に遊ぶ事になった

僕は正直ちよつと不安だ女の子と遊ぶのなんか初めてだからかなり緊張する

北條妹を改めて見ると北條妹はかなり可愛い服もオシャレだし見た目も可愛いそして短髪が良く似合ってる

僕は不覚にも私服の北條妹にドキッとしてしまった

何かくやしい

僕は「その服可愛いね」と言うと

北條妹は「何よ可愛いのは服だけ?」と言ってきた

何かム力ついたせっかく褒めたのにこんな言葉で返したからだ

北條妹も可愛いでも僕は恥ずかしくて言えなかった

僕は「で、行きたい所ってどこなの?」と聞いてみた

「え、行っているの? てつきり姉貴目当てできてるから帰ると思っていたのに」とまた北條妹は生意気な事を言った

「別に可憐さん目当てってわけじゃないしそれにお前とだって遊ん

でみたかったし後、女の子一人じゃあ危ないじゃん」僕はちょっとカッコよく言ってみた

「いいの、私で？」北條妹は照れくさそうに言った

僕は「いいのいいので何処に行くの？」と聞いた

北條妹は「じゃあ・日本橋に行こう」と言った

日本橋は僕が暇だと結構行くかなりお気に入りの場所だいろんな店があるし僕好みの物がたくさんある

僕は「じゃあ行こっか」と言い切符売り場に行った

「何でアンタが仕切ってんのよ」と言いながら北條妹も切符売り場に来た

僕たちは切符を買って電車を待っていた

「何で日本橋に行きたいの？」と聞くと

「私の好きな服屋が新しく日本橋にできたの、開店セールとかで安いからそのうちに買つとこかなー

と思つて」と北條妹はイキイキしながら言った

「そこ、男物もあるの？」僕は聞いてみた

北條妹は「ないよ、男物は残念でしたねー」とまたムカつく言い方で言ってきた

「じゃあ俺別のとこ見とくわ」と僕が言うと

北條妹は「そう」と寂しそうな顔で言った

僕はあせり「冗談冗談あのーほら俺服選ぶの大好きだしさだから・
・そんな顔すんなよ」と服屋には行きたくないけどそういった

すると「本当に、ありがとう♪嬉しいな」と喜んでくれた

僕はまた不覚にも北條妹にドキつとしてしまった

話してると電車が来たので僕たちは電車に乗った

「うあー結構混んでるなあー座れる場所探す？」と僕が聞くと

「いいわよ別に立ってても」と北條妹が言うから

「じゃあ立つておこうか」と僕が言い

二人で壁によりかかり立っていた・・・

電車の中では二人とも黙ったままだった

電車がいきなり揺れだした駅に止まるのでブレーキをかけたのだ

僕は電車の中でバランスを崩しこけてしまった

北條妹に笑われると思ったけど・・・笑わない

何か唇におかしな感触があると思って目を開けたら北條妹もこけて

おり僕は北條妹と唇と唇でキスをしていたのだ

僕は「ごめん・・・今立ち上がるから」と言っただけで立ち上がった

北條妹に殴られると思ったけど北條妹もさっさと立ち上がった。そして北條妹に顔を赤くして小さい声で「バカ・・・」と言われた

僕もあまりにももの恥ずかしさで顔を赤くして「ゴメン・・・」と謝った

北條妹と僕はお互いに黙りこんだ

いきなりこんなアクシデントがあつて今日一日こいつとやってけるのだろうか・・・

第5話アクシデント終わり第6話に続く

第5話 アクシデント（後書き）

ここまで読んでくださった皆さんありがとうございます

感想をお願いします

第6話告白 君にキスしたい（前書き）

どうもこいん0712です

もう6話です

早いですねー

感想よろしければお願いします

第6話告白 君にキスしたい

電車の中でこけてしまい北條妹とキスをしてしまった

北條妹に見つかからないように自分の唇に手をあてるとキスしたときの感触が唇に蘇る

正直に言っ て今のが僕のファーストキスだった

こんなかたちでキスしてもファーストキス

でも相手が北條妹で良かったと思う

何かこう北條妹とアクシデントとわいえど北條妹とキスをして嫌だったと感情まつたく無いむしろもつとしたいと思った

でも北條妹は彼女でも何でもない

向こうからしたら僕とのキスなんてかなり嫌だったろう

そう考えていると電車が日本橋に着いた

僕と北條妹は電車から降りた

僕は「さっきはゴメンお詫びに何かおごるからさ」と多分無理と思うけどダメもとで言ってみた

「いいよ別に気にしてないちょっとビックリしたけどアンタと・・・
・キスして嫌っていう感情も無かったしでも今日の昼ごはんはお

「ごつてもらっちゃうからね」と北條妹は微笑みながら言った

「うん・・・」僕はそっけない感じで答えたけど心の中では北條妹をうっん、美鈴を抱きしめたい、もっとキスしたいという感情が出てきた

「何してんのさっさと行くわよ」と美鈴は改札に早歩きで向った

僕の中ではもう北條妹ではなくて美鈴に変わっていた

僕たちは改札を出るとちょうど12時くらいだったのでどこかで食べてくことにした

「何食べたい？」僕は聞いた

美鈴は「あっさりした物がいいな」と言ったので僕が結構好きなそば屋に行く事にした

僕が「ここの茶そばがかなりおいしいんだよ」と言うと

美鈴が「じゃあ私も茶そばにしようかな」と言い茶そばを二人で注文した

そして茶そばがくると僕たちは食べ始めたすると美鈴が「ホントだおいしいね」ニッコリしながら言った

僕は何も言わず黙々と食べ続けていた

そして食べ終わり店を出た

「じゃいこつか」と僕は言い美鈴が行きたがってた服屋に向った

「楽しみだなー」美鈴はイキイキした感じで言う

僕は美鈴を抱きしめたいそんな気持ちを沈めようと必死だった

服やに着くと「着いたー早速中に入ろう」と美鈴が僕の手を引っ張る

中には女の子の服がいっぱいあった

僕は暇になるのは嫌なので美鈴に似合いそうな服を探していると美鈴に似合いそうな丈が短めのスカートを見つけた

僕は「これ着てみてよ」と美鈴に言う

「へえーアンタこういうのが好きなんだ」と言い試着室に入っていた

そして着替え終わると「レンどう似合ってる？」と言われた

今美鈴は僕のこと下の名前で呼んだもう僕的美鈴を抱きしめたいという感情を抑えきれなくなり試着室に入りドアの鍵を閉めて美鈴を抱きしめた「美鈴好きだ。美鈴ともっとキスしたい美鈴を抱きしめたいずっと電車の中でキスしたときから思ってた」僕はこんな所では無いだろうと思ったけど

感情を殺しきれず告白してしまった

美鈴は「やめてよ」なんか言わずに「私もあなたが好き、あなたは知らないと思うけど中学生の時、私が男子におちよくられてる時に

あなたが助けてくれたその時からあなたが好きだった。だからあなたと

一緒の高校に入ったの姉貴を守るためじゃなくて。電車の中でキスしたとき嫌じゃないっていう感情だけじゃなかったもっともっとレンとキスしたいってレンと抱きしめあいたいって思った。あなたも私と同じこと思っていてくれて嬉しい」

知らなかった美鈴が僕を好きでいてくれたんだってしかも中学生の時から

僕は美鈴に「美鈴、キスするね」と言い美鈴の唇にキスをした

そして僕らは強く抱きしめあった

美鈴の唇から僕の唇が離れると「美鈴好きだよ」とまたキスをした

そしてキスが終わると美鈴が「私もレンが好き、誰よりもレンが好き」と言いながら背伸びをしてキスをしてきた。

僕が180センチぐらい美鈴が165センチぐらい僕もちょっとしやがみこまないと美鈴にキスを出来ないくらいの身長之差、でも僕たちはそんなのなんか気にせず何度も何度もキスをした

何回キスしたかわからないそのくらいキスをした

僕はここが試着室だったことを思い出した

「美鈴いったん出ようか」とほっぺにキスをしながらぼくは言った

美鈴は「うん、そろそろ出ないと怪しまれるもんね」と僕のほっぺにキスをしながら言った

僕達は何も無かったような感じで試着室から出た

こうして試着室の告白により僕達は恋人になった

人生で初めての恋人ができた

そう思つてると「私このスカート買おつかなレンが選んでくれた奴だし」と美鈴が嬉しそうに言った

「俺が買つよそのかわり大事にしてよ」と僕が言つと

「本当に？ありがとう。へへっ今できた彼氏ができてその彼氏に買つて貰えるなんて嬉しいな、大事に着るね」と100万ドルの笑顔で言つた

「じゃあ私はレンに帽子買つてあげるレディースだけどさつき似合いますうな見つけたんだ」

「ありがとう美鈴に買つて貰えるなんて嬉しい」と言つて人に見られないように美鈴のおでこにキスをした

美鈴は「もう！人に見られると、どうするのよ」と照れながら言つた

そして僕達は帽子とスカートを買つて服屋を出た

「そろそろ帰ろつか」僕が言い駅に向つて歩いてると

「おっ 早坂じゃねえか」と聞き覚えのある声が聞こえ嫌な予感がした

第6話告白 君にキスしたい終わり第7話に続く

第6話告白 君にキスしたい（後書き）

最後まで読んでくださってありがとうございます

何か話がR - 15になってきてるような感じですね

感想よろしくお願いします

第7話喧嘩（前書き）

どうもこいん0712です

感想よろしくです

第7話喧嘩

試着室の中で美鈴に告白して何度も何度もキスをした

そして初めての彼女ができた

僕達はスカートと帽子を買って服屋から出た

僕は「帰ろっか」と言い手を繋いだ

美鈴は顔を赤くしながら「うん．．」とうなずいた

僕達が駅に向って歩いてると「あれっ早坂じゃね？」と聞こえた

僕は嫌な予感がして振り向くとその予感は的中した

こいつは僕の名前をバカにしていた木島 浩介だ。でも僕は美鈴と可憐さんに綺麗と言ってもらえたこの名前に誇りを持っている

こいつが、僕達の前に現れると美鈴の手が震えだした

「美鈴？」と美鈴の方を向くとさっきまであんなに楽しそうにしていた美鈴が顔を真っ青にして振るえている

僕は「美鈴どうした？気分でも悪いの？」聞くと

美鈴は「こいつ、私をバカにしたり殴ったり．．嫌あああああ
あ」

といきなり美鈴の様子がおかしくなった

僕は「大丈夫、深呼吸して」と美鈴に言っても美鈴は返事もしない
そしてますます顔色が悪くなってる

僕は美鈴を抱きかかえるとビルとビルの間にあるベンチに座らし「
落ち着いて」といつてみるけど

聞こえてる気配も無いので「ちょっと待っててね」といい軽く抱き
しめると美鈴の顔色がちよつとよくなつた僕は近くの警備員に「す
いませんこの子のこと見といてください体調が悪くなつたみたいで
僕は水かなんか買つてきます」と言つて美鈴を警備員に任して木島
を「ちよつとこつち来い」と言つて路地裏につれてきた

「何だよ」と木島は若干切れていた

「お前美鈴に昔何した」僕は木島をにらみながら言つた

「美鈴？もしかして北條の事か？今のもしかして北條だったのうあ
ーマジ綺麗になつてんジャン付き合つとけばよかったー」とか言い
出すもんだから

「美鈴に何したかつて聞いてんだよ」僕は怒鳴つた

「お前には関係ないだろ」木島があんまりふざけるものだから

「関係なくない美鈴は俺の彼女だ」と言つたら

「マジでーいいなああんな可愛い奴と付き合えてー」とか言うから

「ふざけんなよ」とぶち切れおもいつきり木島の腹を殴った

「痛つてえな」と言うと言つと携帯を取り出し「もしもし俺だけどさしめたい奴がいるから今から来てよ」と仲間を呼んだ

「で、北條になにしたかつて？そりゃあおもいつきり殴ったり蹴ったり集団で悪口言ったりそんなくだよ」と木島は言った

「そんなくらい？、お前女の子に暴力振るったのかよ、女の子の集団で悪口言ったのかよそれをそんなくらいで済ますのかよそんな事して楽しいかよ？」僕はおもいつきり怒鳴った

「ああ、楽しいねそれにあいつが悪いんだよ暗いし気持ち悪いんだよ見てるとイライラするんだよ」木島も怒鳴った

そうしてると木島の仲間達が来た「どうしたのこーちゃん」

「こいつがいきなり殴ってくるからよー」

「うあマジでってあいつ早坂ジャンおーいみんな、こいがいるぜえ」

誰かが言うのと木島の仲間全員が笑ったそして木島が「こいつあの、北條と付き合ってるんだぜ」と言う

「マジかよあ！あの根暗女と恋野郎が付き合ってるの？マジウケルー」また一人が言うのと木島の仲間が全員爆笑した

僕は「イライラするから殴った？暗くて気持ち悪い？美鈴が悪い？つざけんなお前らが悪いんだろ！！！」

どんな理由があっても暴力振るって言い訳ねえだろ！！！悪口言つて言い訳ねえだろ！！！！」

僕はおもいつきり怒鳴り木島の顔面をおもいつきり殴った

木島は2発目で完全にのびた

「おい、お前こーちゃんに何してんだよぶつ殺すぞー」と木島の仲間全員がきれた

見たところ木島の仲間は全員で20人くらい僕はいけると思い「全員かかって来いよ！！！！！！」

と怒鳴ると木島の仲間が「うおおー」と言いながらこっちに来た

僕は正確に一人ずつ完全に潰していった

でも人数が一向にヘラナイ多分増えてやがると思いながら「うああああ！！！」僕は自分に気合を入れ木島グループを全滅さしてやるうと思いがムシヤラに殴って蹴って殴ってを繰り返した

もちろん、僕も攻撃はくらっているでも、でも美鈴が背負っている痛みにしたらこんなのへっちゃらだ

僕は「まだまだ！！！」と怒鳴ると後ろから「死ねええええ」とバツで殴られた

「しまった」僕は倒れるでも「うがああああ」負けるわけには行かない

僕は立ち上がり「お前が死ねえー」と叫んでかかとおとしをかました

「次いいい」僕はそう言うときまたガムシヤラに殴っていく

そしてやつと残り5人くらいになった

もう何人殺ったかわからない

「だあああつあー!!」僕は蹴りを入れるまず一人また気絶させた残り4人

「お前等も死ぬかあああ」僕がそう言うとき

「すいませんでしたあ」と残り4人は土下座した

僕は「もう、俺と美鈴に今後一切関わるな俺達を見つけても話かけんなほかの奴にも言つとけええ」と怒鳴ると

「はいわかりました今後一切関わりもしませんし話しかけません、」

僕は「後もうイジメはすんなよ」と言うとき

「はいもうしません」と言いつて逃げていった

僕は中学生のころ名前が恋なので喧嘩のキューピッドと言う異名を

持つほど喧嘩は強かった

でも、この数とやったことはないのでかなり疲れた
そして、かなり傷だらけの状態で美鈴の下へ帰った

第7話喧嘩終わり8話に続く

第7話喧嘩（後書き）

今回はかなり刺激てきな話になったとおもいます

最後まで読んで下さってありがとうございます

第8話お泊り（前書き）

どうも、こいん0712です

前回は喧嘩の話でしたが今回で恋話に変わります

感想よろしくお願いします

第8話お泊り

僕は久しぶりに喧嘩をした

かなりの人数対僕の喧嘩に僕は勝利したけど美鈴の事が心配だでも体が中々動かないやつと動いたと思ったら僕は倒れた

それでも立ち上がり途中で水を買って美鈴を迎えにいった

警備員の人にありがとうございますとお礼をして怪我のことは何とかこまかした

美鈴の様子は全然変わっていないむしろ悪化してると思い僕は可憐さんに電話で恋人になったことを報告し美鈴の事で相談したらその辺の「ホテルにとまったら？もう恋人同士なんですよ？」と言われた

僕は「わかりました探してみます」と言って美鈴を抱きかかえホテルを探してみてもラブホテルしかない

これはさすがにまずいだろうと思って頑張って美鈴を抱え僕の家に通ぶ事にした駅から自転車でも5分くらいなので僕の家が一番いいだろうと思ひ頑張って駅まで行き切符を二人分買って電車に乗るまでできた

さっき喧嘩した時の傷がかなり痛むので気絶しそうに何回もなった

そして駅についてまた美鈴を一回おろして切符を改札に通そうとした時僕は倒れた意識はまだ飛んでない

でも意識がかすれていくでも美鈴を僕の家には運ばないと思いい立ち上がり美鈴を抱え

改札を通って駅を出て

タクシーを止めた運転手には近すぎてビックリされたが自転車に乗せるわけにもいかなないので

タクシーで僕の家に行って美鈴を僕の家に入れたこの部屋に親以外を入れたのは初めてなので少し恥ずかしかった

僕は美鈴をベッドに寝かすところいう時は服を変えたほうがいいんじゃないか？と思ったけど

恥ずかしくてできなかった

でも服が汗だくで苦しそうだ僕は決心をして美鈴を着替えさせることにした

適当に僕のタンスからＴシャツとジャージを取り出し

美鈴の服をそおーと脱がした

するとブラをつけている胸が丸見えだ

服の上から見るより結構大きかった

Dカップくらいだろうか

僕はそんな事を考えてしまった一瞬理性を壊しそうになったけどなんとか保ちＴシャツを美鈴に着せた

次はスカートだ

僕は美鈴のスカートを脱がすと下着を極力見ないようにしてジャージを履かせた

これで、ようやくひと段落だと思って僕が寝ようとする

美鈴が「嫌やめて痛いやめてよ」とうなされたので

僕は「大丈夫美鈴あいつらは俺が殺つといたから安心して」と抱きしめても

「やめてえいやああ」と美鈴が暴れたしたので

僕が「俺だよ美鈴レン　大丈夫だから落ち着いて」と強めに抱きしめる

うなされるのは収まったが涙を流していたそんなに酷かったのかと思ひシャツを胸の下がぎりぎり見えない
所まで上げるとさっきは気づかなかったけど痣がいっぱいあった

これは、酷いと思った

僕はその痣に「これで安心だよ」と言つてキスをした

そして、体にある痣ほとんどにキスをする

美鈴の顔色が少しよくなったので嬉しかった

僕は美鈴の体にある痣にもう一度キスして風呂に入って出てくると
美鈴の涙が止まり

顔色もよくなってきたのでほっとした

僕は最後に美鈴の唇に5分くらいの長いキスをしてベットの横にコ
タツを持ってきて僕はコタツで寝ようとしたら美鈴の下着姿を思い
出してしまつて寝れない美鈴は服だけじゃなくて下着も可愛かった

それに胸がでかかった

僕は興奮して寝にくかったけど

喧嘩した時の疲れで30分くらいで寝てしまった………

第8話お泊り終わり9話に続く

第8話お泊り（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます

内容がR - 15になって来てるような感じですね

R - 15にしようかな？

第9話美鈴の過去（前書き）

どうもこいん0712です

感想よろしくです

第9話美鈴の過去

昨日、美鈴が木島をみて体調を崩したので

僕の家運んで恥ずかしかったけど汗びっしょりで苦しそうだったので服を着替えさせた

僕もコタツの中で寝ていた

僕が起きると美鈴はまたうなされていたので美鈴の体にある痣にキスすると美鈴の顔色が良くなった

僕が体にある痣にキスをしてると美鈴が起きた

「あんた、何してんのよ！！！」と怒り自分の体にある痣を隠した

僕は「何って美鈴の体にある痣にキスしてた」と言って痣を隠してる手をどかしてもう一度キスすると

美鈴は顔を真っ赤にした

僕が「この痣木島たちにやられたの？」と聞くと

美鈴はせっかく良くなったのにまた顔色が悪くなり「いやあああ」と叫びだした

僕は「ゴメンもうこのことについては聞かないからだから落ち着いて」と言っただけ美鈴を抱きしめて唇にキスをした

美鈴は顔色は悪いけどちょっと落ち着いた

美鈴は「ここどこ？」と今更聞いたので

「俺の家昨日美鈴が体調を崩して帰れそうになかったから俺の家に運んだんだ」僕は説明すると

「服が変わってる」と美鈴が言うから

「俺が着替えさした汗びつしよりで苦しそうだったから」これに対しても僕はちゃんと説明した

「見た？」と聞かれ

「何を？」と言うと

「胸……」と恥ずかしそうに言うから

「見た、胸も可愛かったよ」と正直に言うと美鈴は顔真っ赤にして布団にもぐりこんだ

美鈴は「何でこの痣にキスしてたの？」と聞くから

僕は冗談で「美鈴が昨日ここにキスしてって俺に頼んだからキスしたの」といつてみると

美鈴は「本当？」と聞くので

僕は「冗談だよ着替えさした時にこの痣見つけたからキスしてみると美鈴の顔色が良くなったからキスしてたんだ」といったら

美鈴は「あいつらに何されたか言ったほうがいい？」と言い出したので

僕は「体調崩すからやめときなよ」といったけど聞いて欲しいというので

僕もベットに座って美鈴の手を握りながら聞くことにした

「私昔は暗い女の子だったの髪の毛も長かったしほとんど喋らなかったそれに・・・人とあんまり関わらないようにしてたの、でも毎日あいつらに根暗女とか気持ち悪いとか10人くらいで言ってきたそれに、何度も何度も殴ったり蹴ったりしてきたの周りは誰も助けてくれなかった

先生に言ってもちくつてんじゃねえよってさらに暴力が激しくなったの

私何回か死ぬことも考えたでも死ぬ勇氣はなくて・・・」

僕は「そんな、勇氣いらないこれからは、俺が守るから死ぬなんて悲しいこと言うなよ」といって僕は美鈴を抱きしめた

「ありがとう」と言って話の続き始めた

「それで誰も助けられなくなつたのにあなただけが助けてくれた。もうそれくらいにしとけて、転校生のあなたが止めてくれた私はその時初めて人を好きになって変わろうと思ったの。

そして私をかばったあなたが次はイジメの標的になつてずっと私のせいだと思つて胸が苦しかった」

「美鈴のせいじゃないよ悪いのはあいつらだ、いじめられるほうが

悪いとか言って本当にふざけた奴等だ。だから悪いのは美鈴のせいじゃない」僕は美鈴を強めに抱きしめた

美鈴は「うん・・・」と言って涙を流す

僕は黙って美鈴を抱きしめた

すると全身に激痛がはしる

昨日の喧嘩の怪我が痛み出した

美鈴は僕の怪我を見ると「どうしたの？」と聞かれたので

「木島グループと喧嘩した」と正直に言うと

美鈴は「私のせい？」

僕は違うと言おうしたら

「私のせいだよなゴメン・・・レン私が傷を癒してあげる」と美鈴が僕を押し倒した

僕はベットの上で倒れた

美鈴が僕の上に乗ると「ゴメン・・・」と言って唇にキスをしてきた

そして「怪我痛いでしょう？私がなめてあげる」と言うと

美鈴は本当に僕の傷を舐めだした

「美鈴、気持ちいい」と僕は言い美鈴にキスをした

「次は俺が気持ちよくしてあげる」といい僕が美鈴を押し倒し僕が美鈴の上に乗ると

「美鈴、俺この痣も含めて昔の美鈴も美鈴の全部が好きだよ 美鈴を見てると守りたくなるんだ」と恥かしい台詞を言っ

美鈴の痣に何回も何回もキスした

美鈴は照れた顔で「っん・・・」と言った

僕達は最後に唇と唇でディープキスをする

「美鈴好きだよ」と言っ

美鈴は「私もレンが好き」と言い僕の背中に手を回した

僕たちはそのまま疲れがたまっ

第9話美鈴の過去終わり10話へ続く

第9話美鈴の過去（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます

今R・15にしようか迷ってます

したほうがいいのかな？

第10話胸の痣（前書き）

どうもこいん0712です

感想よろしくお願いします

第10話 胸の痣

僕達はいつの間にか寝ていた

美鈴が先に起きて僕を起こしてくれた

日曜日の朝に寝たので今は昼くらい

僕は「今日も泊まってく？」美鈴に聞いてみた

今日は日曜日だけど明日高校は創立記念日だ何で3連休の前に入學式があるのだろうか？

ずうつと疑問に持つてゐるがわからない

美鈴は「いいの？」と聞いてきたので

「いいの」と僕は笑顔で言った

「じゃあ泊まっていくな」と美鈴がちょっと照れて言った

「私家に荷物取りに行つて来るね」と美鈴が言うので

「俺も行くよ美鈴あんなになつたばっかりだから心配だし」

「わかった、じゃあ行こう」と言つて美鈴は僕の手をつかんでひっぱつた

そして、美鈴の家に着くと可憐さんが出てきた

「大丈夫なの？美鈴」と可憐さんは言った

美鈴は「大丈夫レンのおかげで結構楽になったから」

「じゃあレン荷物取ってくるね」美鈴は家に入っていた

「ありがとうね、レン君」可憐さんがいきなりお礼を言ってきた

「いえ、俺は普通のことをしたただけだから」僕は自分をけんそんした

「俺がお礼言いたいくらいです」僕は、可憐さんに言った

「えっ」

「可憐さんが俺の名前を綺麗って言うてくれて嬉しかったし、可憐さんに会えたから美鈴とも会えたそして、大切って思える人ができた。だから可憐さんに出会えてよかったな」僕は笑った

可憐さんは「そう言ってもらえると嬉しいな」と言ったら

美鈴が「レーン準備できたよ」と玄関に走ってきた

可憐さんが「どこいくの？」と聞くと

「レンの家泊まってくる」僕はそんなストレートに言わないでもいいのにも思いつつ

美鈴が「いつてきマース」と言うと

可憐さんが「迷惑かけたらダメよー」と美鈴に言った

僕は可憐さんに手を振ってさきさき行つた美鈴を追いかけた

「うらやましいな」可憐さんはボソツと言つた

僕の家について「お邪魔しマース」と美鈴が入ると

そつえば「お父さんとお母さんは」と聞かれたので

「アメリカー」と僕は答えた

美鈴は「本当？」と聞いてきたけど

「本当父さんが転勤でアメリカに行つて俺は日本に残りたいから一人暮らししてもらつてるんだ」と答えると

美鈴に「へえーそうなんだ寂しい？」と聞かれて

僕は「結構寂しいよ」と答えると

「これからは私がいるから寂しくないね」と言つて僕にキスをした

僕は「うん・・・」とちよつと照れて言つた

「美鈴風呂に入つてきなよ昨日から入つてきてないし」僕は照れ隠しにそう言つた

「じゃあそつしょうかな」と美鈴が言つたので

ある程度使い方やシャンプーの説明をして着替える場所のドアを閉めた

すると美鈴が「レン私の胸見たんだよね？」と聞かれたので

「うん・・・」と言うと

「そっか、本当に可愛いと思った？」お聞かれたので

「うん」と僕は答えた

「そんだけだから、風呂入ってくるね」と美鈴は風呂に入っていた

僕は美鈴の胸の事を思い出してしまつて変な気分になってきた

けどこの感情を抑えて洗濯物を洗濯機にぶち込んで皿洗いをした

美鈴が「いいお湯だったー」と言つて何故かタオル一枚で出てきた

僕はビックリして美鈴に「どうしたの美鈴パジャマ忘れた？」聞くと

「違つのちゃんと胸見て欲しくて」と言つて美鈴はタオルを取った

僕は一瞬目を閉じたけど「ちゃんと見て」と言われたので

目を開けると胸も痣だらけだったこんなに酷かったのか僕は改めて思った

「医者に見せるとね一生消えないつてどうにもできないつて言われ

たのこんな痣だらけでも可愛いなんて言えるの？」美鈴は泣きながら言った

僕は迷わずに「言えるよ、痣だらけだからって俺が引くと思った？そんな、痣があっても美鈴の胸は可愛いよその証にほら、」僕は胸にある痣にキスをした

「レン・・・ありがとう」美鈴は泣きながら言った

僕は「湯冷めするから早く着替えてきな」と背中をポンッと押した

美鈴は「うん・・・」と涙を手でぬぐいながら言った

「じゃあご飯でも食べようか」と言い適当に作ったチャーハンをだした

「レン料理できるんだね」とまだ目に涙が溜まってる状態で笑いながら言った

「美鈴無理に笑わないでもいいんだよ。泣きたかったら泣けばいいそんな時は俺が肩かしてやるからさ」

僕はカッコをつけてみたら

美鈴が「じゃあ肩借りてもいい？」と聞いてきたので

僕は「全然オッケー俺の肩は美鈴のためにあるんだから」と言う

美鈴は僕の肩で泣いたためいっぱい泣いた木島と会って怖かったってこの痣見られてレンに嫌われるじゃないかって思ったて言いながら

泣いた

僕は美鈴をそつと抱きしめたそしてキスをした

そしてテレビを見たりしてると10時だったので

僕は「寝ようか」と言い

美鈴をベットに連れてって僕がコタツで寝ようとする

「レンも一緒にベットにで寝ようよ」と言うので僕はわかったと言
うとベットに行き美鈴の隣に寝転んだ

また変な気分になってきた

「美鈴キスするね」と言い僕がキスしようとする

「唇じゃなくてここにして」と言つて服を脱ぎ胸の痣を出した

「レンにキスしてもらつと胸の痛みが消えるような気がするの」

僕は「わかったじゃあキスするね」と言い胸の痣にキスをしてほか
の痣にもキスをして

僕は最後に美鈴の唇にディープキスをして

美鈴寝ようかと言

美鈴が裸のまま抱きしめあいながら寝た

第10話 胸の痣 終わり 11話に続く

第10話 胸の痣（後書き）

最後までよんでくれてありがとうございます
まだR - 15にしようか悩みます

第11話初めての・・・（前書き）

どうも、こいん0712です

やっとR・15にしました

感想よろしくです

第11話初めての・・・

僕は9時くらいに起きた

そして、横で寝ていた美鈴を起こすと

「もうちょっと寝かして」と言われ

「裸なんだし風邪ひくよ」と僕が言うと

「じゃあ服着せといて」と美鈴は言った

しょうがなく美鈴に服を着せ僕が朝食の用意をしてると

「オハヨー、おっご飯できてるじゃん」と美鈴は嬉しそうにイスに座った

「レンてっさあご飯作るのうまいよねえ昨日のチャーハンもおいしかったし」美鈴はそう言った

僕は嬉しかったので「ありがとう、そう言ってもらえると嬉しいな」と言って食器を台所にもって行った

美鈴は「食べるの早やつ」と驚いていた

美鈴も食べ終わると「ご馳走様でした」と言って食器を台所に持っていた

美鈴は持ってきていた服を鞆の中から取り出すといきなり僕の目の

前で着替えだした

「ちよつ美鈴何してんの」と驚くと

「別にいいでしょ、私の裸見てるんだし」と言った

僕は「もう、美鈴大胆なんだから」と言っつて美鈴に近寄り

抱きしめた

「そんな大胆な美鈴も好きだけどね」と言い美鈴の唇にキスをして胸の痣にキスをしようとしたら

ブラをつけていたのでずらして胸の痣にキスをした

すると、美鈴は「もう、レンも大胆じゃない」と顔を赤くしながら言った

僕は変な気分になり美鈴をベットに押し倒してしまった

「ごめん」と言い立ち上がろうとすると

美鈴は「いいよこのままで」と僕の腕をひっぱりキスをしてきた

僕は顔を赤くしながら「美鈴していい？」と聞くと

美鈴は「ちよつと早いけどレンならいいよ嬉しい」と照れながら言った

このときが僕の初体験だった

これが終わると僕たちは・・・えっ何が終わったって？恥ずかしくて言えない多分高3くらいの人に聞くとわかる大人に聞くのはやめておいたほうがいいだろう

この行為が終わると僕たちは黙ったまま何回もキスをした

「美鈴気持ちよかったよ」と僕はかなり照れながら言う

「私も気持ちよかったレン・・・うまいね」と美鈴も照れながら言った

僕たちは恥ずかしくなり誤魔化しに何故かきすをした

「これ結構疲れるんだね」僕が言うと

「えっレン初めてなの？」と言われた僕は美鈴はやった事があるの？と思い正直シヨックだった

「美鈴はやったことあるの？」と聞くと

「私も初めてだったよでも・・・レンうまかったから初めてじゃないと思って」

「なあんだ、そっかレンも初めてだったんだ良かったなあ私が初めてで」

僕は「えっ」と反応すると

「あのさあレンがほかの人とその・・・エッチした事があるんだと思ったら胸が苦しくて」美鈴は泣きそうな顔をした

僕はそつと美鈴を抱きしめた

美鈴は僕の腕に手を当てて

「レン、エッチもう一回しようか」と照れながら言った

「何で？」と聞くと

「今度は胸がスッキリした状態でやりたい」と美鈴は言っので

「わかった、じゃあやろうよ」

僕たちは一回に限らず何回もやった

「どう？美鈴気持ちいい？」

「レン・・・気持ちいい最高」

こうして初めての・・・美鈴が言ったから言うけどエッチが終わった

「やっぱり、レンはうまいね」美鈴は顔を赤くしながら言った

僕は「恥ずかしいからもう、さっきしたこと事は言っな」と言いキスをした

「わかった、じゃあ最後に一つだけレン好きだよ」美鈴は僕の指を甘く、くわえながら言った

僕はそれを見てまた美鈴を押し倒したくなったけど感情をコントロ

ールしてそれをするのをやめた

「美鈴それはいつでも言っていんだよ」僕は美鈴を後ろから抱きしめて耳をアマガミしながら言った

「レンの・・・エッチ」美鈴はそう言って服を着だした

僕も服を着た

「そろそろ帰るね。まだ昼だけど明日学校だし」

「そう？じゃあ送るよ」僕はそう言っただジャンパーを着た

春だけどまだ結構寒い

「ありがとう」美鈴は笑顔で言った

そして、美鈴の家に着くと

「美鈴・・・好きだよ」と玄関でキスをした

「もう、姉貴きたらどうすんのよ」と美鈴は言った

「じゃあ、俺帰るわー」

「うん、じゃあバイバイ」と美鈴は手を振った

僕も手を振りながらバイバイと言って変な奴に会うと嫌なので走って帰った

僕は家に帰ると皿洗いしながら今日美鈴としていたこと思い出して
いたらまた変な気分になった

第11話初めての・・・終わり12話に続く

第11話初めての・・・（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます

何か内容がエロくなってきましたね

出来れば感想よろしくお願いします

感想ないと寂しいです

第12話学校（前書き）

どうも、こいん0712です

感想よろしくです

まだ感想が一つもありません

第12話 学校

昨日初めてエッチをした

気持ちよかったけど同時に恥ずしいと言う感情もあった

入学式の後の三連休も終わり今日は学校だ

僕が学校の用意をしていると「ピンポン」インターホンが鳴った

僕が「はい今行きます」と玄関に行ってドアを開けたら美鈴がいた

美鈴は「おっはよー」と言っ僕のほっぺにキスをしてきた

僕はそれで完全にスイッチが入った

「美鈴、おはよう」と言っ僕美鈴の唇にディープキスをしたら

美鈴の顔が真っ赤になった朝から唇にキスされるなんて思わなかったのだろうか

僕は美鈴に「まだ用意できてないから入っ」と言っ

「やったー」と言っ僕美鈴と可憐さんが入っ行っ

えっ可憐さん？と僕は心の中で驚いてリビングに行く

可憐さんがいた「おはようレン君」と言われたので

僕は「おはよう可憐さん」と言っただが

「何で可憐さんがいるの?と聞くと」

「美鈴と一緒に登校したいからレン君の家に行こうって言うからでもレン君が美鈴にキスしてるところ見れるとは思わなかったなーレン君も意外とやるんだね」って言われた

僕は顔を真っ赤にした美鈴が照れていたのは可憐さんが居たからなんだ

僕はそう思うと急に恥ずかしくなった

それでも用意を続けて「準備出来たからいこう」と美鈴と可憐さんに言って

玄関で靴を履き外に出て自転車に乗ろうとすると

美鈴が「今日は歩きだよー」と言うので

僕はマジですか?と思いつつも美鈴たちと歩いて登校した

そして、学校に着くと僕と美鈴は1年校舎に可憐さんは3年校舎に向かった

美鈴と話ながら階段を上っていると凄いうるさい声があった

そして、教室に入ると僕たちは学校に来るのが遅いほうだったらしく教室の中は飛行機の音くらいあるんじゃないかって思うくらいうるさかった

僕と美鈴は席が離れているので別々の席に行った

僕はまだスッキリしないので1時間目まで寝ようと思って寝ようとしたら

「レーンっ」と美鈴がいきなり話しかけてきた

僕は「何？」と聞くと

「今日3時間で学校終わるらしいから放課後デートしようよ」と言われたので

「放課後は・・・何も用事入ってないから別にいいよ」と言う

「ホントに、やったあー、じゃあ行きたい所考えといてね
あつ後今日一緒に帰ろうね」と笑顔で言った

喜ぶ美鈴がかなり可愛かった

僕はここが学校じゃなかったらキスしてたのにーと思いつつ

「わかった、考えとくよ」と言っでキスはさすがにこんな所じゃできないので美鈴の体にある痣を軽くなでた

美鈴は照れながら「じゃあ私喋ってくるからー」と言っで女子が溜まって居る所に行った

僕はやっと寝れると思って寝ようとしたら

「はーやーさーかー」と言う声がしたので顔を上げると知らない奴だったので無視して寝る体制に入ったら

「何で無視するんだよう」と言われ

「俺は眠いんだよ」とちよつと半ギレ状態で言った

「俺は山本 大和」といきなり自己紹介したので

「あつそ やまがいつぱいで大変ですね。じゃっ俺は寝るから」と僕が言つと

「俺と友達になつてよ」と山本はいきなり言い出した

僕は「わかった、わかったから俺を寝かせてくれ俺は眠いんだ」と言つと

「本当に？」

「ああ」

「やったー友達が出来たーじゃあさメルアド交換しようぜ」と山本は携帯を取り出した

僕は「あー今日俺忘れたからまた今度な」僕は適当にあしらつた

「えーーーーーーーまあ忘れたんだからしょうがないよな
じゃあ今日はお前の家に行かしてもらつわ」

僕は何だこいつぶつ殺してやろうかと思えるくらいのずつずつしい

奴だ

「無理今日は先約があるから」僕ははつきり断った

「じゃあ俺も行くー」と山本言い出した

僕は「ダメダメ今日は遊ぶわけじゃなし」僕は嘘は言っていないだつて今日は美鈴と「デート」をするんだから

「遊びじゃないのは嫌だなあじゃあ、一緒に帰ろうぜえ」と言われたので

僕は「それも先約がある」と言ったら

「えーマジかよお前案外人気者なんだな　じゃあ明日よろしくー」と言つてどっかに行った

僕はやっと寝れると思ったたらホームルームが始まるチャイムが鳴った今日はホームルームは無いので

1時間目が始まる合図だ

僕は一睡も出来ていないので1時間目が10分くらいたつと「先生しんどいので保健室行ってきます」

と言つて教室から出る時に美鈴の席はドア側の端っこなので「放課後俺の鞆持つて保険室に迎えに来て」と書いたメモを見つからないように渡し

保健室に行った

そして僕はしんどいと言って

保健室でベットの借り爆睡した

第12話学校終わり13話へ続く

第12話学校（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます

可憐久々の登場と新キャラ登場です

大和はずうずうしいキャラが書きたかったのでレンの友達役として
出しました

感想またはアドバイスよろしくです

第13話保健室（前書き）

どうもこいん0712です

感想または、アドバイスお願いします

第13話保健室

僕は今日山本とかゆう奴のせいで寝れなかったので、しんどいと言
って保健室で爆睡していた

初めて授業をサボった

僕が寝ていると「レン起きてーもう放課後だよ授業終わったよー」
と声がした

「美鈴？」と僕が言うと

「レンが迎えに来てって言ったんでしょ」美鈴がほんの少し怒りな
がら言った

「美鈴・・・おはよう」僕は美鈴を押し倒しベットに寝かしキス
をして服を脱がそうとした

「ちよっレン？ここ、学校だよ？」美鈴は驚いていた

僕は美鈴のブラを少しずらし痣にキスをして美鈴の唇にディープキ
スをしたとこで我に返った

「美鈴ゴメン・・・寝ぼけてた。これ着て」僕はそう言って脱がし
た服を渡す

「レンのバカっ私もするからねっ」と言っ
て僕の首にキスをして
僕の耳をアマガミした

「美鈴・・・続きは後でしょうか」美鈴にキスをする

「もう、レンのエッチ今日はデートするんだからできないよ・・・
また今度ねっ」美鈴は照れながら言った

僕は「そうか・・・残念」と言って美鈴の胸をゆつくりなでた

「っん・・・」と美鈴はちよつとエロい反応をした

美鈴は僕の手をつかみそれを口元に持っていき「私とデートするの嫌？」と泣きそうな顔で言った

僕は「全然嫌じゃないよむしろ嬉しい美鈴と一緒に居られるんだから今は・・・おかしな気分になっただけ」

僕は泣きそうな美鈴抱きしめてちよつと流れた涙を指でふいた

「レンっ嬉しいあたしもレンと一緒に居れるの嬉しいっ」と言っ
て服を着た

まだきてなかったのかよ皆はそう思ったかも

「レンっ今日何処行きたいか決まった？」と言ったので

「美鈴は何処がいい？」と聞くと

美鈴は「今日はレンが決めてよ、この前は私の行きたい所行っ
たから」

僕は「美鈴ゲームする？」と聞くと

「嫌いじゃないけど」と言っただので

僕が「じゃあ、一緒に出来そうなの買いに行こうか」と言ったら

美鈴は「どこへ?」と聞くので

「ショッピングモールあそこなら服も置いてるしね」と僕は笑いな
がら言った

「うんッ」私服見てもいい?」と聞かれたので

僕は「もちろんッ」と言った

「そろそろ出ようか」と言つと僕たちは手を繋ぎながら保健室を出た

第13話保健室終わり14話へ続く

第13話保健室（後書き）

最後まで読んでくれてありがとうございます

今回は保健室がテーマだったので結構短くなったと思います

感想、アドバイスよろしくお願いします

登場人物

早坂恋

この小説の主人公昔は自分の名前にコンプレックスを持っていたけど今はこの名前に誇りを持っている

喧嘩は相当強い

昔は喧嘩のキューピッドと呼ばれていた

このあだ名はレンが恋って名前って言うのもあるけど喧嘩した相手ほとんどがレンに憧れるカラ付いたらしい

北條美鈴

この小説のヒロインでレンの恋人

初めて出てきた時とキャラが変わってるのは最初はツンデレだったけどレンに心を開いて素の自分に戻った

昔いじめられてたけどレンが助けてくれた時に変わろうと決意して髪の毛を短くして性格も明るくした

北條可憐

美鈴の姉

高3で頼れるお姉さんって感じの人

レンの友達第1号

山本 大和

ずうずうしい奴

とにかくずうずうしい奴

木島こうすけ

昔美鈴をイジメてた主犯

レンのこともからかっていた

第14話デート♪(1)(前書き)

どうもこいん0712です

感想、アドバイスお願いします

第14話デート♪(1)

僕は保健室で寝ていて美鈴が迎えに来たので帰ることにした

「ねえっレン」美鈴がいきなり言い出す

僕は「何？」と聞くと

「レンはどんなゲームが好きなの？」と聞かれたので

「エロゲー」と冗談で言ったら

「そうなんだ、だからエッチうまいんだね。でもそんなゲームできるかな？」と美鈴は照れくさそうに言った

「冗談だって本当はRPGとかかなコマンド選ぶのがめんどくさいけどストーリーがしっかりしてるのが多いから」と僕が言ったら

美鈴は「そうなの？もうレンのバカッ本気でそんなの出来るか考えちゃったじゃない、それに・・レンがそんなに興奮してるんだと思うたら胸が痛くなってきたじゃないのー」怒りながら言った

「ごめん、俺が見てて触って聞いて興奮するのは美鈴だけだよ」と言って抱きしめた

「本当？」

「本当」僕が言うと

「嬉しい・・レンがゲームの中の人とは言えど取られるのは嫌だもん」美鈴は小動物みたいな目をして言った

「俺は誰の物にもなりやしない、美鈴だけのものだよ、美鈴は俺だけのもの」僕が言つと

美鈴は「うん・・・」と顔を赤くしながら呟いた

そついう話をしてると美鈴の家に着いた

「じゃあ美鈴、家で待ってるから準備したら俺の家きてね」と言つて美鈴にキスをしてダッシュで家に帰つて用意をした

そして、お茶を飲んでゆつくりしていると「ピンポン」とインターホンが鳴つたので

今行くーと言つて玄関のドアを開けると

山本だつた

「何しに来た」僕はキレながら言つた

「何つて遊びに来たんだよ」山本が言つた

「今日は無理つて言つたら」僕が言つたら

「お前本当は遊ぶんだろ高校生が短縮の時に遊ばない奴なんていないからな」と言つたその時

美鈴が「レーン来たよー」と美鈴が迎えにきた

「ほら、やっぱり遊ぶんじゃねえカー」山本は勝ち誇ったような言い方をした

美鈴が「この人誰？」と聞くので

「こいつは……」僕が言おうとすると

「俺？俺は山本大和カッコいいだろう良かったら付き合っ？」とか山本が言い出すので冗談でもムカついた

殴ってやろうと思ったら「それは結構私彼氏いるんで私は北條美鈴後あなたのこと1ミリもカッコいいと思わないから」美鈴は元イジメられっことは思えないほどキツイことを言った

「そういうことだから　じゃっバイバーイ」僕はそう言って美鈴を家に入れ用意をしてもう一度外に出るとまだ居たがほっという「美鈴乗って」と言っで美鈴を自転車に乗せて二けつでショッピングモールへ向った

「美鈴どっか人が居ない所に行ってもいい？」と聞くと

「別にいいよー」といつてくれたので誰も居ない、来ない僕の知ってる隠れスポットに行った

「ごめん……嫌な思いしたでしょあいつのせいで」僕は謝ると

「別に大丈夫、あんなの慣れてるから」

「そう、よかった」僕はホットした

僕は気づき「もしかして美鈴そのスカート」と言った

「気づいてくれた？この前レンが買ってくれた奴だよ、似合うでしょ」美鈴は喜びながら言った

「似合うよ可愛い」と僕は言った

「美鈴が嫌な気分になってないか確認したかったただだから、そろそろ行こうか」僕と美鈴は自転車に乗りショッピングモールへと向かった

第14話デート(1) 終わり15話へ続く

第14話デート♪(1)(後書き)

変な終わり方さしてすいません

感想、アドバイスおねがいします

第15話デート♪(2)(前書き)

どうもこいん0712です

感想が1件もありません人気ないのかな？

感想、アドバイスよろしくです

第15話デート♪(2)

僕と美鈴はショッピングモールに着いた

僕たちはまず服屋に行く事にした

「レンにはどんな服があうかなあ？」美鈴は僕の前に立って言う

「俺のはいいよ美鈴の服を見に行こうよ」と言ったら

「えーレンの服見に行きたい」と美鈴は僕の手をひばっていった

「レン、どんな服がいい？」美鈴が聞いてきたので

「薄めの長袖がいいかな」僕が答えると

美鈴はごっそり持って来た「気に入った奴ある？」美鈴は言いながらその服を僕に見せた

「これかな？」と言って僕は2、3着選んで試着室に行った

試着室と言えば僕が美鈴に告白してキスをした場所だ

そんなことを思いながら僕は着替えた

「どう？美鈴似合う？」と美鈴に見せたら

「いいじゃんいいじゃん、これ買おうよ」美鈴がハシヤギながら言う

「ゲームも買うから一枚ね」と僕は言つて一番気に入ったベースが黒色でちよつと絵の入つてるＴシャツにした

自分でも言うのは何だけど結構オシャレだよっぱり美鈴はセンスがある

僕が買つてあげたスカートも似合う奴と合わせてかなり可愛くなつていた

僕は会計を済まして美鈴の所へ行くとナンパされていた

美鈴はハッキリ言つてかわいい芸能人になつたらすぐ売れるんじゃないかってぐらい可愛いだから、結構ナンパはされるらしい

「おい、俺の彼女に何やってんだよ」僕は男のお手をつかみながら言つた

そいつらは「ああ、誰だお前」とキレてきたので

この手を使いたくなつたが「早坂レンって名前聞いたことぐらいはあるだろう」と言つた

すると、そいつらは「まさかつあなたが自分の名前をバカにされただけでうちの高校に乗り込んできて

不良校で有名なうちの高校を壊滅状態に追い込んだ喧嘩のキューピッド早坂レン!？」

「ああ、後呼び捨てにすんじゃねえよ殺すぞ」僕は笑顔で言つた

「すみません!レンさんあなたの女とは知らずに手を出してすいま

「せんでしたあ」と言つて土下座をした

「おう!!次俺の女に手え出したぶつ殺すからな」僕が言うと

「はい、もうしません!!!!!!!!!!!!!!」と言って逃げていった

美鈴は僕の横で僕の顔をじいっと見ていたそして「何であいつらし
ンが潰しに行った高校だってわかったの？」と聞かれた

僕は「あいつら制服の胸の所にその高校の名前書いてたからさああ

僕が相当荒れていたことは同じ中学とは言えど隠してたのに

「てかッ レン不良だったんだね 良く喧嘩してたのは知ってたけど」

「うん」僕はばれたのが相当シヨックだった

「私の痣見てレン可愛いその痣も含めて美鈴が好きだあつて言つたよね？」美鈴が聞いてきた

僕は「うん」と答えた

美鈴は「私もそれと一緒にで不良だったレンも含めての大好きなんだからさ気にしなくてもいいよ」

むしろ、昔のレンのこと知れて嬉しかったし」美鈴は笑顔で言った

僕は「ありがとう、美鈴そう言ってもらえると嬉しい……」

よしっゲーム屋行こうか」と僕は美鈴と手を繋ぎゲーム屋に向った

ゲーム屋に着くと「美鈴どんな、ゲームがいい？」聞くと

「エロゲー」と答えた

僕は「本当に？」と聞くと

「冗談だよーさっきのお返し♪本当はねえ格ゲーがいいかな？あれ
対戦プレイすると面白いんだよねー」

と美鈴は言った

「格ゲーはこれがオススメだよ」と美鈴に見せたら

「じゃあこれにしよう♪」と言うので割り勘で買った

その後自動販売機でジュースを買って

自転車に乗ろうとすると風邪が吹いた

すると美鈴のスカートがめくれてパンツが見えたピンクのヒモパンだ

僕は顔を真っ赤にした

美鈴は「ねえ今見たでしょ？」と言うので

僕は正直に「うん、見た」と答えた

「もうっ、レンのエッチ」美鈴はそう言うと僕の唇に背伸びをして
キスをしてきた

僕が照れていると「ほらっ早く行くよー」と自転車に乗って言うので

「わかったよー」と言って自転車に乗ってこぎ始めた

そして、美鈴の家に着くと「美鈴じゃあ、また明日学校でね」と言
って美鈴の唇にディープキスをした

「うん……明日もレンの家に迎えに行くじゃあバイバイ」と
照れながら小さく手を振った
美鈴はまだディープキスに慣れてないらしくディープキスをする
と照れる

そう思うと僕も恥ずかしくなってきた「バイバイ」と言って全力で
家まで自転車をこいだ

第15話デート(2) 終わり16話に続く

第15話デート♪(2)(後書き)

最後まで読んでくれてありがとうございました

マジで感想、アドバイスよろしくお願いします

第16話学校(2) (前書き)

どうも、こいん0712です

初めてこの小説を書いてから感想をもらいました

かなり嬉しいです

これからも頑張ります

後感想、アドバイスよろしくです

第16話学校(2)

僕は6時くらいに起きて暇だったのでずうっとベットでウダウダしていたら7時半になっていた

「やっべ、もうすぐ美鈴来る時間じゃん」と思い急いで着替えて用意をして歯を磨いていたら

「ピンポン」っとインターホンがなった

その後「レン来たよー」と美鈴の声がしたので「今行くー」と言う急いで寢癖を直し玄関のドアを開けた

「おはよう」僕は息切れをしながら言った

美鈴は「おはようレン、どうしてそんなに息切れしてるの？」とクスッと笑いながら言った

「ちょっと寝坊して」僕はそう言うのとドアの鍵を閉めて外に出た

「じゃあ行こうか」僕は美鈴の手を取り歩こうとすると

「皆に見られると恥ずかしいから・・・ゴメン」と僕の手を離してさっさと歩き出した

「美鈴待つてよー」僕は早歩きで美鈴を追いかけた

「美鈴」僕は美鈴の肩を両手でつかみながら言った

「な、何」美鈴はびっくりしてる感じだった

「美鈴が恥ずかしいんだったら手を繋ぐのはやめるけどさきさき行くのはやめてもらっていいかな？」

何か自分が拒否されてるって感じしかないからさあ 美鈴は俺のこと嫌い？」僕が言う

美鈴はおもいつきり首を横に振って「そんな、わけないよレンのことは好き・・・でも皆に見られてまたおちよくられるのは嫌だから・・・」美鈴は寂しい顔で言う

「そうか・・・わかった手は繋がなくても一緒に登下校はしような俺達恋人なんだからさ

でも別に周りに何か言われてもいいじゃん俺達の関係はそんな簡単に壊れるものだったの？」僕が聞くと

美鈴はまた首をおもいつきり横に振る

「じゃあさ、周りに何言われてもいいじゃん そんなの「コイツ等こんなことしないと生きてけないクズだ」って思えばいいじゃん もし酷い悪口とかわだたら俺が殺ってやるからさ」僕はキレイ事かもしれないけど美鈴に周りを気にするような高校生活を送ってほしくないからそう言った

「レン・・・ありがとう後字が怖い普通は殴ってやるからとかなのに殺ってやるって、レン面白いね」

美鈴は笑いながら言った

そして、美鈴は僕の手をつかみ「行こうか」と笑顔で言った

「おうっ！！！！！」僕もその手を握り締めて歩き出した

僕たちは学校に着くと自分の席に向って座った

座った途端に山本が「はーやーさーかー今日遊ぼー」と走ってきた

僕は「別に……今日はいけるぞ」と言ったら

「マジでいいの？やったー」と山本は大ハシヤギしていると

美鈴が「レーン、今日デートしよう」と言って走ってきた

僕は美鈴は外だと手を繋ぐのは嫌がるのに何で教室だとこんな大声でデートとか言えるのだろうと思った

「ゴメン美鈴今日こいつと遊ぶからデート出来ない」と断った

すると、山本が「えっ北條さんの彼氏ってこいつなの？」と言いだしたので

美鈴はしょうがなく「うん、そうだよ何か悪い事でもある？」ときつい言葉で返した

「あっそくだレンこいつと遊ぶんだったら私もいい？」と聞いてくるから

僕が答えようとすると「無理に決まってるだろう」と山本がいきなり言い出す

「お前は黙れ」僕は山本の腹を軽く殴る

「こいつが居ても良いんだったら、いいよ」僕がそう答えると

「本当？やったー」美鈴は喜んでいた

「俺は嫌だー」山本が言った

僕は「じゃあ来んなよ」と言うと山本は黙った

僕とそんなに遊びたいのだろうか？

美鈴は「今日は何処に行く？」と言うと

「カラオケっ」と山本が大声で言った

美鈴は「いいねーレンと行くの初めて！」と言ったが付き合い始めてそんなに経ってないんだから行ったこと無いのは当たり前だ

僕は心の中でツッコむ

「じゃあ、放課後準備出来たら俺の家集合な」僕はそう言ってトイレに行った

「了解」美鈴と山本がハモリながら言う

美鈴は女子の群れに飛び込んで行った

山本は携帯で誰かと喋っていた

僕はトイレから出てきて自分の席に座り1時間目まで寝ることにして寝た

第16話学校(2) 終わり17話へ続く

第16話学校(2) (後書き)

最後まで読んでくれてありがとうございます

また、変な終わり方さしてすいません、

この話は前回から3日後金曜の話です

どの話にも書いてませんが美鈴とレンはメルアドを交換済みです

書こうと思っていたのですが忘れていました

山本とはまだです

感想、アドバイスよろしくです

第17話カラオケ（1）（前書き）

どうもこいん0712です

この小説もかなり話が進んできたなあと思えます

この小説を書いていると「僕もこんな恋をしたい」と思います

皆さんは恋してますか？

感想、アドバイスよろしくです

第17話カラオケ（1）

「キンコーンカーンコーン」昔から同じのチャイムが鳴る

僕は終わったーと思って帰る準備をしていたら

「レーンっ」一緒に帰ろー」と僕の手をつかんで言ってきたので

「オツケー、今準備するから待って」と言ったら

「早坂一緒に帰ろっ」と山本が突進してきたので僕はそれを避けて軽く蹴った

そして「嫌だ今日遊ぶんだから一緒に帰らないでいいだろ」僕は美鈴と手を繋ぎ教室を出て

「俺の家に早めに来いよー」と言って階段を下りようとしたら

「待ったー！！！！北條俺と今日カラオケで勝負だ！」とか叫びだした

「どうやって？」と美鈴が聞くと

「カラオケの採点機能でっ

賞品は早坂を日曜日好きにしている券」と山本が言っと

「よしその勝負乗ったー」と美鈴もおかしな事を言い出だした

「ちよっ美鈴？何勝手に決めてるのねえ」僕が言ってもまったく二

人とも聞こうとしない

「じゃあ決戦場で会おう」とか山本が言い出した

「山本、集合場所は俺の家だから」と僕は言っただ階段を下りた

僕は帰り道で

「美鈴？何であんな事言っただの俺美鈴にだったら変なことじゃなかったら何でもするのに」僕は説教みたいな感じで言う

「ゴメン日曜日どうしても、レンと二人っきりで桜見たかったから」美鈴は悲しそうな顔で言っ

「大丈夫、美鈴が負けても土曜日見に行けばいいじゃん」僕は美鈴の髪を手でグシャにしながら言っ

「うん！でも日曜日もレンを好きにする為に頑張る」美鈴はグーをつくり胸の前でガシツとしながら言っ

僕は美鈴が言ってる事を理解してないなと思っただけど何かめんどくさいのでほっとく事にした

そして美鈴の家に着くと「じゃっ家で待ってる」と言っただ美鈴の唇にキスをする

毎日美鈴の家の前でキスをして自分の家に帰るこれが僕の日課になっ

「うん、待つといて、じゃあバイバイ」と手を振りながら言っ

僕も手だけ振ってダッシュで帰る

そして、着替えてお茶を飲んでゆっくりしていると「ピンポン」とインターホンが鳴ったので

「今行くー」と言っただけで山本だった

「ようつ早坂、北條はまだ来てないのか？」と聞かれたので

「まだ、来てないよ」と言っただけ

「じゃあ中で待つところ、お邪魔しマース」と僕の家に入ろうとしてきたので

「おい、何してんだよお前は外で充分」と行ったら

「ブー」と言っただけで地面に座り込んだ

そしていきなり山本が「なあ、北條とエッチはもうしたのかよ」と言い出したので

「調子に乗るな！！！」と言っただけで座ってる山本を立たしてコブラツイストをかけた

「イタイイタイマジで痛いから早坂」そう言っただけ

僕は「ギブ？」と聞いただけ

山本は「ギブ ギブ×10回」と言っただけで離してやった

そして僕たちは笑う何かわからないけど笑う

僕は友達がいなかったからこれが友達なんだと思った

そんな事やってると「あゝ二人とも楽しそー」と言いながら美鈴が来た

僕たちはカラオケボックスへと向った

第17話カラオケ（1）終わり18話へ続く

第17話カラオケ（1）（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます

このごろ、変な終わり方ですいません

一応この話のまとめのオチを考えながら書いてるので「変な終わり方だなー」と思わないで下さい

感想、アドバイスよろしくです

第18話カラオケ(2) (前書き)

どうもこいん0712です

贅沢かもしれませんが感想が……1件しかありません

コンチクショー

こんな、贅沢な僕に感想、アドバイスよろしくです

第18話カラオケ(2)

僕達は放課後カラオケに行く話になった

そして今カラオケボックスに居る

「風船ガムクチャクチャ」

山本が歌っている、意外にうまい

そして山本が歌い終わった

採点結果は・・・「83」それを見て山本は「イエーイ」「フー」とテンションが高かった

次は「恋しちゃったんだ多分気付いてないでしょう星の夜願い込めてCHEER Y」

美鈴が可愛い声で歌った

そして歌い終わり美鈴の採点結果は・・・「89」それを見ると「やったー山本に勝ったー」
どうだ山本見たか「これが私の歌唱力だー」と美鈴もテンション高
けえ

山本は悔しがってる

何の勝負をしてるかって？

こいつ等勝手にぼくを日曜日好きにしていいい券かけて点数勝負やりやがった

でも美鈴が勝ってホッとした

美鈴歌うまかったしな

歌を歌ってる時の美鈴綺麗だった

でも………

「お前等レベル低すぎ」と言って僕が歌を入れると

「お前等って私も？89は低くないでしょうレベル」と美鈴が怒ってきた

「早坂89以上獲れなかったら土曜日俺がお前を好きにするからな」とわけのわからない事を言い出した

僕は歌い出す

「And all my hopes and dreams -
aren't for anyone
I keep them safe and sound

And all these victories - not yours
any more
Well can you hear me now?

The dead stop dreaming - I'll see
tablaze this life

Your shadow keeps me bright
Sooty and stop me - or suffocate
ethis light
Because I can burn all night
Until -
My heart stops beating
You'll never hear me say - I'm b
ackling down
If I say -
It's lost it's meaning
If I can't find my way - It's ov
er, now
But I won't walk away
Till the day
Woh - oh . Woh - oh
I've never backing down
Woh - oh . Woh - oh
And Hear me say
Woh - oh . Woh - oh
I'll keep it safe and sound
Woh - oh . Woh - oh !

I'll keep it safe and -
This hopeless feeling
This fear of falling down - but
I'm not crashing now
For all this bleeding
It wasn't worth the sound of
illions screaming out
And still
The end comes reeling
The curtain calls my name - I'm
not afraid
And I know
You may not miss me
But I am not ashamed - the Choric
e I've made .
But I can't let this go
Till the day
Woah - oh . Woah - oh
I've never backing down
Woah - oh . Woah - oh
Just hear me say
Woah - oh . Woah - oh

I'll keep it safe and sound
 Woah-oh. Woah-oh
 I'll keep it safe and sound
 Woah-oh. Woah-oh
 Just Hear me say
 Woah-oh. Woah-oh
 I've never backing down
 Woah-oh. Woah-oh
 Til the day
 Will the world watch us burn
 With the engines giving out
 ssengers
 Like the final words of the pa
 That's racing to the ground
 tar
 Like a crashing car or dying s
 I'll keep it safe and ?
 Woah-oh. Woah-oh!
 I'll keep it safe and sound

W o a h - o h . W o a h - o o h

I ' l l k e e p i t s a f e a n d s o u n d

W o a h - o h . W o a h - o o h

I ' l l k e e p i t s a f e a n d s o u n d

W o a h - o h . W o a h - o o h

I ' l l k e e p i t s a f e a n d s o u n d ♪」

美鈴も山本も驚いていた

まさか僕が洋楽を歌う思っていなかったろう

そして採点結果は「・・・・・・・・」 「山本は飲んでいたジューズを漫画のようにはいた「マジかよ」

美鈴は借りたタンバリンを振りながら「レンすごいー」と大ハシヤギしていた

僕の採点結果は「100」と出ていた

僕は心の中で当たり前だと思っていた

だって中2くらいから洋楽歌えたらカッコいいと思ってずっと練習してたから

僕は二人に向かって「なっこれ見るとお前等がレベルが低く見えるだろー」と言っと

美鈴は「すごいレン歌うまかったんだね」と抱きついてきた

山本は顔を赤くして無言で座っている83で喜んでいた自分が恥ずかしいんだろうか？

僕達はその後もいっぱい歌って楽しんだ

そして、カラオケボックスで山本メルアドを交換して別れた後僕と美鈴は美鈴の家に向かって歩いていたら

「きゃあああああつああ」美鈴が叫んだ

美鈴がバイクに乗った黒服の奴にさらわれた

「美鈴っー」僕は叫んで走った追いつかない

クソーと思っていると美鈴の携帯から電話があった

「もしもしー北條助けたかったら××番通りの路地裏まで来いよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・木島あああああ」

第18話カラオケ(2) 終わり19話へ続く

第18話カラオケ(2) (後書き)

最後まで読んで下さってありがとうございます

今回は変な終わり方ではなくちゃんと19話に引っ張れたので嬉しいです

次回いよいよクライマックスです

第19話キューピッド死す（前書き）

どうもこいん0712です

お気に入り件数が一人減ったので寂しいです

感想、アドバイスお願いします

第19話 キュービッド死す

美鈴と美鈴の家に向って歩いてたら

美鈴が黒服の奴にさらわれた

僕は全力で走ったけどバイクには追いつかなかった

僕は「クソー」と叫んでその辺の物にあたっていると

美鈴の携帯から電話がかかってきた

「美鈴？」僕が出ると

「北條を助けたかったら××番通りの路地裏まで来い」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・木島あああああああ
ああ」僕は怒鳴った

「プチップープー」切られた

僕は走った全力で美鈴の身に何か起こる前にもう、起こってるけど
美鈴にこれ以上傷ついてほしくない

「木島あああ！」僕は指定された場所に着いたら木島の仲間100
人くらい多分それ以上とナイフを突きつけられてる美鈴がいた

僕が殴ろうとすると「おっと、待てよお前の大事な彼女がどうなっ
てもいいのか？いいんだったら殴れよ」木島はせこいことを言う

「くっどうすれば美鈴を開放してくれるんだ？」僕が聞くと

「お前は俺等の気が済むまで殴らしてくれればいいんだよ」と木島は唾を吐きながら言う

「じゃあやれよ殴り終わったら美鈴離せよ」僕は腹をくくった

「何でそこまでするのレンっ私達まだ付き合い始めてちょっとしか経ってないんだよ？なのに何でレンは私の為にそこまでするの？」と美鈴は泣き叫びながら言った

「お前のことが美鈴のことが好きだからに決まってるからだろう時間なんて関係ない俺はこんな事したいって思うからなんだよだから、泣くなよ俺も涙が出てくるじゃんかよう」僕は泣いた

「いつまで、イチャついてんだ」木島がまず俺の顔面に蹴りを一発入れた

そして、鉄パイプ、バット、などの武器を持つてる奴もいた

そして僕は何発も何発も無抵抗なまま殴られた

「死ね、カッコつけるからこうなるんだよ」木島が言ってる

「やめてよ、もうやめてー」と美鈴は言ってるけど僕にはほとんど聞こえてない

意識が薄れていく

僕はラストに鉄バットで頭を殴られた

その一発で僕は意識が無くなりその場に倒れた

「もう、充分だ」行くぞ木島が仲間をつれてどこかに行った

「レン大丈夫？レン、レンゴメン私のせいで私があんな奴等に捕まるから」美鈴は大泣きしながら行った

美鈴の涙が僕の顔に落ちた

僕はそれがスイッチとなり変なものが見えた

木島と美鈴が付き合ってるそして「あいつ、絶対バカだよねえ普通あんな事までしないよ？私は他人なんだから」そして、二人が僕の悪口を言ってるのも見える

やめろ、やめろ、やめてくれ、やめろ、やめろおおおお

頼むからなあ美鈴それ以上俺のことを言うなあああ

僕の意識が戻った

木島グループに殴られた場所のまま

美鈴は涙でせつかくの可愛い顔が台無しになってる

「レン気がついた？良かったさあ帰ろう？もうこんな痛い思いしなくていいから

もう、傷つかないでいいからお願いもうやめて」

美鈴は倒れてる僕を抱きしめながら言った

美鈴の服が僕の血で赤く染まってる

「うん・・・」と僕はうなずこうとした

でもこんな終わり方でいいのだろうか？美鈴の心に傷が残ったまま終わっていいのだろうか・・・

いい訳がない美鈴を泣かしたままではダメだ

僕は全身の痛みを我慢して立ち上がる

「美鈴俺、行くよ痛みは我慢できる俺は傷ついてもいい」

「でも、美鈴を泣かす奴は自分の父親でも母親でも親戚でも友達でも親友でも許せない絶対に許せない」

「だから・・・だから俺行くよ決着をつけに」僕は美鈴に思っていることを伝えた

「何で？何でそこまで決着にこだわるの？このままじゃダメなの？何でレンは自分をそこまで傷つけたがるの？」美鈴は僕の顔を優しくなでながら言った

「俺は自分を傷つけに行くんじゃない美鈴の心には俺の傷より深くてデカイ傷があるよね？体の傷なんかはほっとけば治るでも・・・心の傷はしかも深くてデカイのにほっといて治るわけが無いんだ俺は治す方法はやっぱり、元凶を断つしかないと思う。それでも治

るのはちよつとだろう治りきらなかった傷は俺が一生をかけて治してやるから、だから・・・だからまず元凶を断たないといけないんだよ。あいつをやらないと俺がその傷を治そうとしても一生1ミリも治らないと思う

俺は自分を傷付けに行くんじゃない、美鈴の心から笑える笑顔を守りに行くんだ。美鈴に泣いてる顔は似合わないよ。俺が奴と決着付けないと一生美鈴は心から笑えないよ？」僕は真剣な顔をして言った

「わかった、でも・・・レンどこかに行ったりしないでね？あいつらと決着が付いてもレンが居なくなったら私の前から消えたら意味ないんだからあ」美鈴はまた泣き出した

「ああ、絶対戻る。そして木島との決着がついたら美鈴の傷を一生かけて治す美鈴を一生守る約束する」僕は美鈴の涙を指で拭きながら言った

雨が降ってきた

美鈴は「何それ？プロポーズ？」と少し笑った

僕は雨の中美鈴にキスをした。今までで一番好きって守りたいって感情の入ったキスをした

僕は「そうだよプロポーズだよ、もう美鈴以外は考えれない」もう一度さっきのより愛情のこもったキスをした

「嬉しい」美鈴は僕を抱きしめながら言った

「美鈴じゃあ行って来るね、これ俺の家の鍵」僕は美鈴に鍵を渡した

「えっ」

「俺の家で待つといて必ず帰るから」僕は美鈴の手をつかみながら言った

美鈴は「うん・・・待ってる」と言った

僕達はさっきよりもっと愛情のこもったディープキスをした

「美鈴一人で帰れる？」と聞くとちよつと無理かな？と言う返事だったのだ

「じゃあ可憐さんに電話して迎えに来てもらってから二人で俺の家で待つといて」と言つて

僕は雨の中走つていった

何でだろう？レンもう会えない気がするよ・・・・・・・・・・

第19話キューピッド死す終わり20話へ続く

第19話キュービッド死す（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます

最後の一言は分かりますと思いますが美鈴の言葉です

次回もクライマックスなのでぜひ読んで下さい

感想、アドバイスお願いします

第20話君の事が好き♪でも・・・（前書き）

どうも、こいん0712です

感想、アドバイスよろしくです

第20話君の事が好き♪でも……

僕は絶対帰ってくると言ってきたでも……その約束は守れそうに無い

一歩一歩歩くたびに意識が飛びそうになる

でも、ここで木島を潰さないと僕はその事しか頭になかった

僕は武器を持っていない

さすがに今回は武器が無いとキツイだろうと思ひ

近くにショッピングモールがあったので木刀と赤いマジックを買った

そしてマジックで木刀の持つところに「血祭り」と書いた

こうすると、何か気合が入る

そして、木刀は昔からの僕の相棒だ

それを片手に木島を探す

そして、木島グループの下っ端を見つけ

「おい、携帯出せ」と言つてボコボコにして携帯をぶん取った

そして、僕は木島に電話をかける「俺だよ、早坂さっきの場所で待ってる、お前の仲間全員連れて来い

ぶつ潰してやるから 逃げんなよ」と言って電話を切った

僕は木島達に来るまで少しでも体力を回復させようと思って地面に寝転がっていた

すると「舐めたマネしてくれんじゃねえか」木島が来た

僕は立ち上がり「遅かったじゃないの木島ちゃん」とふざけていた
ふざけてないと倒れそうだ

「お前一人なのに良くそんなに調子乗れるなあ」そう言っ
て木島は僕に石を投げた

僕の腕に直撃した

避ける体力が無い

僕は「もったいぶらずにかかって来いよ」挑発して雑魚の頭をおも
いつきり木刀で殴った

こうして、僕と木島グループの全面戦争が始まった

僕はガムシヤラに木刀を振り回して10人くらいを潰すとおもいつ
きり鉄パイプで背中を殴られた

「くっ」僕は前みたいに叫んで気合を入れる体力も無い

でも美鈴の為に美鈴の傷を治すために戦った

「りやつああああ」何とか声が出た

もうすぐ、意識がなくなりそうだっていうほど頭がクラクラする

僕はそれでも木島グループの奴を何十人が潰せた

そしてまた、殴られた僕は倒れこむ意識が無くなり掛けた瞬間美鈴の泣き顔が頭に浮かんだ

もう、あんな顔をして欲しくない

ずうっと笑っていて欲しい

だから

、負けるわけには行かない

「いけないんだよおお!!!!」

僕は木刀を振りかざし周りにいる雑魚どもを吹っ飛ばした

僕は勝つそう心に決めてまた、木刀でガムシヤラに殴っていく

僕はいつのまにかバットで殴られて倒れていた

そして蹴られた「チクシヨウ、あと30人くらいなのにチクシヨウ

チクシヨウ」僕はそう叫び立ち上がると

ベンチを持ち上げて振り回した

そうすると、残りは木島だけになっていた

「んだよ、俺とやるつてのか」と言いナイフを取り出した

僕は最早喋る気力も無い黙って木刀を振りかざしナイフを持ってる手をおもいつき殴った

木島はナイフを落とす

そして、僕は木島に近ずいて行った

木島は膝を地面につけて「お願いだやめてくれ、頼む止めてくれ！
なあ？」

僕は体力を振り絞つて、「そう言つた美鈴に何したまだ、イジメを続けただろ、何回も何回も殴つたろ」

なのに自分だけ助かるうとするなああああ！！！！！！！！！」

僕はそう叫んで木島の頭を木刀ですべての体力を使い殴った

僕はこうして木島グループを全滅させて決着を付けた

僕はやっ
たあーと
叫べない

体力がまったく残っていないからだ

僕は倒れた

僕は携帯を取り出し文を打った

打ち終わって

「美鈴好きだでも・・・約束守れそうに無いごめん」

僕はそう言った後、意識が無くなった

「プルルルルル　プルルルルル」電話が鳴る

「レン君かも」と姉貴は言って

「はいっ早坂です」電話を取る

「えっ、わかりましたすぐ行きます」

「美鈴、レン君が倒れて今病院に居るらしいんだけど意識が無いって」姉貴は焦った顔で言う

私のレンと会える気がしないって言う予感ハ的中したらいけないかったの的中してしまった

第20話君の事が好き♪でも・・・（後書き）

最後まで読んでくれてありがとうございます

次回感動の最終回です

楽しみにしていってください

最終話君の事が好き♪だから……………（前書き）

どうも、こいん0712です

今回で最終回です

今まで読んで下さってありがとうございます

感想、アドバイスお願いします

最終話君の事が好き♪だから・・・・・・・・

「美鈴っレン君が病院に運ばれたって 後意識も、戻らないって」
姉貴が焦った顔で言う

「えっ・・・それ本当にレンなの？ きつと人間違いだよレンは絶対帰ってくるって約束したもん
だからそれはレンじゃないよっ！！」

本当はそんな事は思わないでも信じたくない

私の当たってはダメな予感が的中した

「とりあえず、病院行こっ
美鈴が近くに居るほうがレン君も安心するよ」姉貴は私の手をつかみ引っ張った

「うん・・・」私は姉貴の手をギュッと握んだ

怖いレンが死ぬ。そう思うと恐怖しか考えられないレンは死ぬの？

答えはわからないのに自分自身に聞く

姉貴はタクシーを呼びタクシーで病院に向った

何で姉貴はこんなに落ち着いてるのだろうか？もしかして、他人だから？

私はこんな事しか考えれなくなってた

病院に着くと真っ先に姉貴が受付でレンはどこにいるか聞いてレンが運び込まれた病室に行った

私の足が止まる

「美鈴？」姉貴が聞いてくる

「私怖い、怖いよレンが死ぬかもしれないって考えても今のレンに会うのも怖いよ」私は弱音を吐く

でもレンは弱音を吐かずに私の為に戦ってくれた

だから・・・だから今度は私がレンを守ればいいのだろうか

ずっとそばに居てあげればいいのだろうか

わからない、考えるたびに頭がおかしくなる

「大丈夫、レン君は死なないから美鈴に絶対戻ってくるって言ってるでしょ？」姉貴が慰めるように言う

私は無言で首をゆっくり縦に振った

「じゃあ大丈夫レン君は約束を破るような人じゃないって」姉貴のこの言葉で私の足が動き出した

そして、レンがいる病室の前に着いた

私はそっとドアをあける

すると、レンが医療器具をいろんな所に付けて寝ている

私は、レンの近くに寄ってレンの顔に手を当ててみる

すごい、傷私のせいだ

私があの時行くのを止めてたらレンはこうはならなかった

私はそう思うと涙が出てきた

「レンっ何でこうなっちゃたの？私のせい？ねえ何とか言っつてよレンっ！！！！」

レンは私の傷を一生かけて治すって言っただけどこんなんじゃ治るものも治らないじゃない
私を一生守ってくれるんじゃないの？

レンがこんなじゃれんがいなかったら元凶を断つても意味ないじゃない！！！！」

私はレンの手を握って泣きながら言った

レンは起きようもしない

レンはこのまま死ぬのだろうか

医者はもし意識が戻ったら軌跡と言っていた

そんなにレンは悪いのだろうか？

レンは何でこんなことになるまで私の為にやってくれたのだろうか、

誰だって死ぬのは怖いのに

もし、レンが死ぬ可能性のほうが高いのであれば最後まで見届けよう私はそう決意した

「姉貴」私はこのことを姉貴に話許可をもらい学校をちょっとの間休む事にした

多分学校に行ったら何かしら言われると思うけど今はレンのほうが大事だ

私はレンの個室でとうぶん生活することにした

「レンこの前ね山本がお見舞いに来てくれたんだよ、でねまたカラオケ行こうって言ってた」

私はレンにずっと話しかけていた

そして、一週間が経って私はレンのお父さんに電話したほうがいいのか？と思いレンの携帯は国際電話対応なのでレンの携帯を棚から取って、画面を見ると

未送信メール1件と書いてたので見てみると私へのメールだった

レンは送信する前に倒れたのだろうか？

とにかくメールの文を見ることにした

でも、怖くて見れない

でもこれがレンの最後の言葉になるのかもしれない

私は勇気を振り絞って決定ボタンを押した

文には「美鈴、俺はこんな状況になってもやっぱりお前の事が好きだもっとお前と遊びたかったし、もっと、お前とキスしたい、美鈴がディープキスになれるまで慣れてもずっとキスし続けるけど、・・・それにもっとお前とエッチしたいだって俺等まだ1回しかしてないんだぜ？もっとしたいじゃん、もっと気持ちよくなりたいじゃん、エロくてゴメン・・・」

後もっともっとお前と居たかった・・・俺が大好きな美鈴とずっと居たかった

そしてなにより・・・美鈴と笑いあいたかった美鈴の笑顔を見たかった

俺が取り戻した美鈴の笑顔を見たかった

でも・・・それも叶いそうにない多分お前との約束を破る事になる

美鈴・・・本当にゴメン でも俺は世界で一番美鈴がすk「こう書いてあった

私はこのメールを読むと涙が出てきた

今までにないくらいの量の涙が出てきた

「レンっ願いが叶いそうに無いってどういうこと？

レンが目覚ませば叶うじゃん レンが目覚ませばいっぱい遊べるよ？

山本ともまたカラオケにいけるじゃん

それに私とキスするんでしょ 何で私がディープキスに慣れて無いつて知ってるのよ

何か恥ずかしいじゃない 後私とエッチするのだって目を覚まさない

いとできないよ

本当にレンはエロいんだから何で死にかけの時にそんな事考えるかな？

もっと私と居たいって私もそうだよ、だからレン死なないでよ

私と笑い合いたって笑顔が見たいてってレンが死んだら私一生笑えないよ

だから、だから起きてよレンっ!!!!!!!!!!!!!!」

私はレンの体に顔を乗せ、大泣きながら言った

するとレンの手がピクツと動いた気がした

「レン？ レン？ 聞こえる？ 私北條美鈴だよ」

するとレンの口が動き出した

「み・す・ず」

「何？レン何？」

「俺約束破らないで済むかも」レンはゆっくりだけど喋った

「レンっ 起きたんだね？ 目覚ましたんだね？」 私は聞いた

「ああ、多分バツチリ」レンはかすれた声で言った

「良かった、本当に良かった」私はまた涙を流した

「美鈴は泣き虫だな、笑ってるほうが可愛いのに」レンはゆっくり手を動かし私の涙をぬぐった

「レンが心配かけるから泣いてるんじゃない」私はそう言ってレンを抱きしめた

「レン・・・あなたの事が誰よりも好きだからもう離さない絶対に」私がレンにキスをしようとすると

「美鈴それ、俺の台詞。でも言われたから台詞変える。俺も誰より美鈴が好きだ。だからまだまだ、先の話だけど結婚しよう、もうキスしていいよ」レンはそう言うのと私の手を掴んで引っ張った

「バカ、どれだけ先の話してるのよ」私はそう言ってレンにキスをした

初めて自分でディープキスをした

やっぱり恥ずかしい

「レン世界で一番レンが好きだよー」

最終話君の事が好き♪だから・・・・・・終わりシーズン2へ続く

最終話君の事が好き♪だから……（後書き）

最後の最後まで読んで下さってありがとうございます

あれっと思っただ方もいると思います

そうです、綺麗だね♪は、シーズン2に続きます

本当は数年後の結婚式を書いて終わろうと思ったのですがこの小説をまだ書きたかったのもう少し続けようと思います

まだ、どんな、話にするかは未定ですがシーズン2は高校生活をもっと詳しく書いていきたいと思っています

まだ続ける？と思っただ方もいるかもしれませんが、これからも「綺麗だね♪」を

よろしく願います

今まで読んでくださった皆さん本当にありがとうございます

そしてシーズン2楽しみにしてください

シーズン2のURLです

<http://ncode.syosetu.com/n5489k/>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3593k/>

綺麗だね♪

2010年10月11日22時02分発行